

〈論文〉

## 西洋占星術に見る人の生死と運命

比留間 亮平

人と星との関わりは、人の歴史そのものよりも古い。歴史とは時間の経過に伴う物事の推移を記述したものであるが、そこで基準となる「時間」を知るためには、まず天体の観測が必要であったからである。地上の移り変わりやすいものとは決定的に異なる、天体の規則的で永遠にも思える運行は、それを神そのもの、あるいは神によって置かれた上位の存在とみなすに十分なものであった。そして、それが神あるいは上位の存在である以上、下位の存在である地上の事物に影響を及ぼすのは必然的なことと考えられた。この天体からの影響を見定めようとする技芸が占星術と呼ばれるものである。このような天体に対する信仰とそれを理解するための技術たる占星術は洋の東西を問わず広く見いだすことができるが、本論は星座占いとして今日でも広く普及している西洋占星術を対象とし、それが古代以来人間の生死や運命に対してどのような考えを取ってきたのかを素描する。

### 1. 西洋占星術の成立

現代の占星術書などでは占星術が数千年前に遡る古代の文明から連綿と受け継がれてきたものとされることもあるが、これはある意味では正しく、ある意味では正しくない。というのも、天体の観測とそのデータの蓄積は多くの古代文明でも行われていたが、占星術なるものは単なる観測データの蓄積から一歩進み、天体の運行の数学的な予測とそれがもたらす影響の自然学的な理論化がなされて初めて成立するものであるからである。たとえ今日から見ると未熟で誤ったものであるとしても、占星術の基本的な精神は経験科学のそれと軌を一にしている。それは、偶然的で一時的な作用によって振り回されるものではなく、規則的で予測可能な法則に従うものとして宇宙（コスモス）を理解しようとする。そのようなデータの蓄積と天文学的發展はまず

古代のメソポタミア文明において始まり<sup>1)</sup>、次いでアレクサンドロス大王以後のヘレニズム世界でギリシア人学者らの手によってとりあえずの完成を見た、とするのが科学史的な通説である。

メソポタミア文明では前 2000 年紀から特定の天体の状態を地上の様々な出来事の前兆として記録する前兆文献が作られていたが、これは前 1000 年ごろに『エヌマ・アヌ・エンリル』と呼ばれる前兆の一大集成にまとめられた。さらに前 700 年ごろまとめられた『ムル・アピン』という前兆の集成には黄道の周辺に存在する 17 の星座が挙げられている。そこには雄牛、蟹、獅子、天秤、蠍、乙女、魚、双子など今日黄道 12 星座として知られているものが多数含まれており、後の獣帯の起源をここに見出すことができる。その後前 7 世紀ごろからはこれらの黄道上の星座を基準にした日ごとの惑星の位置の精密な記録が始まり、それは「日録」としてずっと継続されていく。このような過程を通じてバビロニアでは天体を観測し、記録するための様々なツールが発展していき、それは後の西洋占星術にかなりの程度形を保ったまま受け継がれることになる。<sup>2)</sup>

しかし後の西洋占星術で鍵になるところの「ホロスコープの作成」という作業はこの時期にはまだ現れていなかった。現存する最古のホロスコープは紀元前 410 年のものであるが、これ以外のバビロニアのホロスコープはみなこれより 100 年ほど後の紀元前 3-4 世紀以降のセレウコス朝期に作成されたもので、アレクサンドロスによる統一後になってようやく現れてくる。この時期はバビロニアの天体観測データがギリシアに吸収され、大きな天文学的発展がなされた時期でもある。すなわち紀元前 4 世紀にクニドスのエウドクソスにより、目に見える天体の状態を記録しているだけであったこれまでの天文学から一歩進み、自分を中心とした様々な天球の回転の組み合わせによって成り立つという宇宙の幾何学的モデルが考案されたのである。このギリシア天文学は最終的に 2 世紀のプトレマイオスの『アルmagest』によって一応の完成を見るが、本論で扱う占星術もこの天文学的な発展とある程度並行しながら理論的な整備が行われていき、最終的に同じくプトレマイオスの『テトラビブロス』<sup>3)</sup>によってその基礎理論がまとめられることになる。この『テトラビブロス』にまとめられた占星術理論がその後の中世、イスラーム、ルネサンス、そして現代にまで至る占星術理論の基本となっており、本論も伝統的占星術と言う際にはこれを基本にする。

## 2. 占星術の基礎理論—惑星、宮

西洋占星術は別名「ホロスコープ占星術」とも言われる通り、ホロスコープの作成と解釈をその中心に据えている。ホロスコープとは、ある人間が生まれた瞬間の各惑星の位置を図に示したものを指す。人ではなく、都市や建物の運命が問題になる時はそれらのホロスコープが作成されることもある。惑星は地球がそうであるように太陽を中心にした楕円軌道状を移動しているため、地球から見た惑星の位置は常に太陽が通る天球上の道すなわち黄道12宮の内部にある。太陽、月も含めた7惑星<sup>4)</sup>のそれぞれが黄道12宮のどこにあるのか(例えば木星は白羊宮の6度にある、など)、そしてそれらの7惑星が東の地平線と西の地平線から見てどこにあるのか(例えば水星は東の地平線=上昇点から6度にある、など)、大まかに言えばこの二点を表したものがホロスコープである。このうち前者が「宮」と呼ばれるもので、後者は「家」と呼ばれる<sup>5)</sup>。これによってその人間の運命は決まるとされる。

このような占星術の発想は現代的な視点から見るといかにも迷信的に映るが、既に述べた通り占星術の発想の根本にあるのは自然学である。例えば、毎日太陽が高く昇っていき地表から離れるほどなぜ気温が高くなるのか。太陽の最高高度が高くなる夏のほうが地表に近い冬よりもなぜ気温が高くなるのか。またなぜ月の位置によって潮の満ち引きが起こるのか。なぜある地域は他の地域よりも常に気温や湿度が高いのか、なぜある地域はその逆なのか。そしてなぜそれらの地域に住む人々は、その身体的特徴においても精神的特徴においてもそれぞれ他とは全く異なる特徴を持つのか。占星術こそがこれらの疑問に答えを与えてくれるものであった。すなわち、太陽は日周運動においても年周運動においても天球上の特定の位置にいるときにその「温める」力を最も強く発揮し、別の位置にいる時にはその力が弱まることは観察から明らかであるが、これは特定の黄道12宮が惑星の力を強めたり弱めたりすることによって生じると考えられたのである。そして太陽がそうであるなら、そのような惑星の影響力と宮との関係は太陽だけではなく他のすべての惑星においても当てはまることになる。それらの惑星の影響力とその力が増減する場所、さらにそのような影響力がもたらされる領域を明らかにす

ることが占星術の目的であった。このように占星術が扱う領域は、今日の学問分類で言うなら天文学を中心にしながらも気象学、地理学、医学、それに宇宙物理学などが入り混じった多面的なものであった<sup>6)</sup>。

では、そのように人間も含めた地上の運命が天体の活動に依存していたら、それはどのようにして読み解かれねばならないのであろうか。時代や著作によって若干の差はあるが基本構造は同じで、占星術でホロスコープに意味を与える要素は①惑星、②宮、③家の三つである。アスペクトや支配星、区界による宮の分割といった様々な占星術的技法はこの三つの基本要素に対し、より多様で柔軟な意味を持たせて肉付けするためのものであり、ベースとなるのはあくまでこの三要素である。その基本的な作用理論をごく簡潔にまとめると以下ようになる。

- ①各々の「惑星」はその神話的性格付けに応じて有益な、あるいは有害な力を有するが、
- ②そのような力はそのときに惑星が位置している「宮」との相性によって増減し、
- ③そのように増減した力がそのときに惑星が位置している「家」が司る領域に及ぼされる（生命、結婚、財産、死など様々）。

上記の三要素のうち、もっとも基礎的な要素として働くのが惑星である。年代上でも参照している資料の点でも最も古いマニリウスのものなどを除いて、現代に至るまでほとんどの西洋占星術では惑星こそがそのシステムにおける主体として働くとされている。宮やその分割、あるいはアスペクトといった要素はみな惑星の影響力を増大させたり減少させたりするための係数として働くものであり、また家もそれ自体は影響力を持つものではなく、あくまで惑星の影響力が人生のどのような領域に及ぶかの方向づけをするための装置である。基本となるのは惑星とその諸性質が及ぼす影響力なのである。惑星には凶星と吉星、およびその中間のものがあるが、それらの影響力はその神話的性格に応じて伝統的には以下のように決められていた。

凶星	土星（サトゥルヌス）、火星（マルス）	破壊的、破滅的
中間	水星（メルクリウス）、太陽（アポロ）	吉凶混淆的
吉星	木星（ユピテル）、金星（ウェヌス）、月（ディアナ）	生産的、調和的

プトレマイオスはこれを各惑星の神話的性格に訴えるのではなく、温冷乾湿の四性質がもたらす破壊的／生産的作用に基づいて説明しようと試みた。言い換えるならプトレマイオスは占星術を当時のアリストテレス主義自然学の枠内に置きなおし、それによって説明することを試みたと言える。

「既に述べたように、それら自身の活動的な諸力とともに探求の具体的な方法を説明しながら、これらの問題のそれぞれについて簡潔に述べていこうと思う。多くの人が労力を無駄にしてきた、もっともらしい説明を与えられないような無意味な事柄は追放し、第一の自然的な原因へと向かおう」（強調は比留間による）。<sup>7)</sup>

例えば太陽の熱と地球の湿気から最も遠い土星は寒と乾という性質を持ち、寒と乾は破壊的で受動的な性質を持つからこれが土星の破壊的な性質の原因として働くというのがプトレマイオスの説明である<sup>8)</sup>。金星などはこの逆であり、生命や活力の源となるような温かさと湿気とを生み出すとされる。この説明は一応自然学的なものともみなせるかもしれないが、その後諸惑星の性質と作用を男性的／女性的、昼的／夜のなどと分類・整理していくにつれ、その説明には擬人的で神話的な要素が強まっていくことは否定できない。

このようにおのおのの惑星はそれぞれの属性に応じた影響力を持つが、それは常に同じように発揮されるわけではない。すでに述べた通り、惑星の影響力を増大ないし減少させるある種の係数として働くのが「宮」である。黄道12宮も惑星と同じように「男性的／女性的」、「地水火風」、「単一／複合」、「立っている宮／座っている宮」など様々な分類がなされるが、おのおのの惑星はその性質と適合する宮にいるときはその影響力が増大し、そうでないときは減少する。

それを端的に表すのが「高揚／失墜」という概念である。ある惑星がその

影響力を最大に発揮できる場所が高揚位、その反対が失墜位で、この高揚位と失墜位はちょうど黄道12宮の正反対の場所にそれぞれ存在する。例えば春の始まりを告げる第一の宮である白羊宮では太陽が高揚する一方で土星は失墜し、そしてその反対側にあり秋の始まりを告げる天秤宮では逆に土星が高揚して太陽が失墜する、といった具合である。

この例からも明らかなように、宮の性質とされているものには我々が毎年経験する四季の変化というものが大きな影響を及ぼしている。無論これは現代的な視点からの話で、占星術的に言えばその四季の変化を生み出しているものこそが宮の性質なのであるという逆の話になるわけであるが、そのことを表しているのが宮の「様態」という概念である。これには「始動／安定／転換」という三つの性質があり、それぞれが四季のある季節を「始め」、そしてそれが「安定」したあと、別の季節へ「転換」していくとされる。例えば春の始まりの宮である白羊宮は「始動」の宮で、次の金牛宮が春の「安定」の宮となり、最後に双児宮が「転換」の宮として春を終わらせる。そして次の巨蟹宮が夏の「始動」の宮となる、といった具合である。

これらとは別に特異な意味を持つのがその宮の「支配星」<sup>9)</sup>という概念である。占星術の基礎は惑星の影響力にあるということはすでに述べたが、宮や家が12あるのに対して惑星は7つしかなく、仮に全ての惑星がバラバラに割り振られたとしても、12のうち最低5つは何も惑星がない、すなわち惑星の影響力が及ぼされない場所になってしまう。宮の「支配星」とはその宮と強い親和性をもっている惑星のことで、仮にその宮に惑星が入っていなかったとしてもこの「支配星」が代理としての役割を果たし、似たような影響力を及ぼすとされる。例えば獅子宮の支配星は太陽なので、獅子宮の全体は太陽が持っているのと似たような力を持っていることになる<sup>10)</sup>。

### 3. 占星術の基礎理論一家のシステムと人の生死

最後に「家」であるが、占星術における生死と運命を考える際にはこれが最も重要になると思われる。これも宮と同じく獣帯を人為的に分割することによって得られるが、春分点を基準にして分割する宮とは異なり、こちらは太陽が昇ってくるころの東の地平線にある上昇点（アセンダント）を含む四つの基本地点によって分割する。すなわち上昇点に加え、西で没するとこ

ろの下降点、最高高度である中天、人間から見ると足の下にある天底、この四つを基準として分割する。春分、秋分を除いてこの四つの基本地点は90度ずつの四分円を構成しないため、家をどのように12個に分割するのはか今日に至るまで占星術師の間で議論が続く大問題となっている。家の分割方法は50以上もあるとも言われ、占星術師ごとに分割方法が違うのはもちろん、同じ一人の占星術師が占う事柄の内容に応じてそれぞれ異なる家の分割方法を採用することも多い。

ここでは話を簡単にするため、春分、秋分の日90度ずつの綺麗な四分円をそれぞれ30度ずつに分割するような単純なモデルで考えることにしたい。計12個の家は東の地平線にある上昇点を始点として、そこから星の動きとは逆向きに順に1から12までを割り振ることによって作成される。すなわち今まさに地平線の下から上ろうとしている部分が第1の家となり、そこから足の下にある天底までの90度が順に第2、第3の家に割り振られる。そこから西の地平線までにあるのが4、5、6番目の家となり、今まさに西の地平線に沈もうとしている部分が第7の家となる。そして西の空から南の空にある中天までが8、9番目となり、そこから始点であった上昇点まで戻ってくる東の空の部分が10、11、12番目の家となる。

既に述べたように、家の基本的な機能は惑星および宮の影響力がもたされる領域を決定することにある。惑星には吉星も凶星もあり、それぞれが特定の宮や他の星との向かい合う角度などによってその影響力を増減させるが、仮に土星が強い力を持っているホロスコープに生まれた人がいたとしても、人生の全ての面において不幸になるわけではないし、同じように金星が優勢な生まれの人であっても常に幸福に恵まれるわけではない。社会的地位にも金銭にも友人にも恵まれなかったとしても家庭だけは幸福な人や、あるいは正反対にそれらすべてに恵まれていても幸福な家庭を築くことだけではできなかった人などは多くいる。これは惑星のプラスの力やマイナスの力が人生のすべての領域にではなく、それぞれの家によって決められた方向にだけ作用することによって起きると考えられた。

占星術師ごとや時代ごとにかなり相違はあるが、それぞれの家が司る領域はおおむね次頁の表のようになる。

例えば、愛を司る吉星である金星が第7の家にあり、しかも高揚してい

第1の家	生命、肉体
第2の家	富、財産、商売
第3の家	兄弟、隣人
第4の家	両親、家
第5の家	子供、自由
第6の家	敵、病氣、奴隷
第7の家	結婚
第8の家	死、遺産
第9の家	友情、旅行、異国での生活
第10の家	名誉、地位
第11の家	友、福利
第12の家	損失、不幸

のような人は幸せな結婚をすることになるだろう。しかし同時に第3の家に凶星である土星がいるなら、その兄弟は短命で亡くなってしまうかもしれない、などということになる。

プトレマイオスは『テトラビプロス』の最後の部分である第4巻で家の問題を多く扱っているが、例えば4巻6章「子供について」には以下のような記述がある。

子供の問題について知りたいと願う人は第11の家かその反対にある家(第5の家)<sup>11)</sup>に注目する必要がある。そこに月、木星、金星があればそれはその人が子供に恵まれる予兆である。反対に太陽、土星、火星があるならその人はわずかな子しか持たないか一人の子も得られないことを示している。水星はここでも両義的な星として扱われ、それが「明けの明星」として、すなわち太陽の東にあって明け方に現れる星としての位置にある時は多産の予兆となり、「宵の明星」として、すなわち太陽の西にあって日没後に現れる星としての位置にあるならそれは子に恵まれないことの予兆となる。しかし惑星の影響だけですべてが決まるわけではなく、それが位置する宮を考慮することも重要である。それらの星は「女性宮」、**「転換宮」、あるいは双魚宮、磨羯宮、巨蟹宮**といった多産を象徴する宮にいるならその力が強まり、多くの子を与えてくれるだろう。男性的な惑星が**「男性宮」**にいる場合は男の子が生まれ、その反対の時は女の子が生まれるだろう。有害な星の影響力が強かったり、獅子宮や処女宮といった不毛を象徴する宮にいたりするときは生まれた子は短命で亡くなるだろう…<sup>12)</sup>。

このような説明が「子」の家に関する記述であるが、似たような説明が結婚や友人、敵や外国への旅行などの家に対しても行われる。それらの説明は



いずれも興味深いものであるが、ここでは特に「死」に関する占星術的な解説を見てみたい。『テトラビプロス』において死がテーマになっている章は大きく二つあり、一つは第8の家が司るところの「死」、すなわちその人がどのような死に方をするかに関する章で<sup>13)</sup>、これが正しいならほとんどの人は非業の死を迎えることになる。もう一つが古代以来占星術にとっての最重要テーマだったその人の「寿命」の計算方法に関する章で<sup>14)</sup>、このテーマの重要性と機密性もあってか、これは『テトラビプロス』全体で見ても飛びぬけて長い章となっている。

まずは前者の第8の家が司るところの死、その人の死因の予知についての章について見てみると、やはり死因を決定する第一の原因となっているのは惑星で、ここでは凶星も吉星も等しく死をもたらすことになる。例えば土星は消耗、間接痛、悪寒や高熱を伴うような長く苦しい病の果ての死や、脾臓や腸の異常、水腫、さらに精神異常による死などをもたらすとされる。吉星である木星もここでは残酷な処刑人に変わり、窒息、肺炎、脳卒中、痙攣を伴う発作、頭痛や心臓疾患などによる死をもたらすとされる（これらは苦痛を伴う時間が短い分、土星などと比べまだ「幸福」な死と考えられたのであろうか）。

それでもこれらは病などによる自然死である分、死に方としてはまだ耐えられるほうであるかもしれない。土星や太陽などの星が特定の配置にあるときは、このような自然死ではない突然の死がその人を襲うことになる。絞首刑、野獣の襲撃、溺死、建物の崩落、海賊や山賊、王による処刑など、プトレマイオスが挙げるリストには当時一般的であったであろう様々な「非業の死」が並んでいる。問題はある人が自身のそのような運命を前もって知ることができたとして、その運命を回避できるかどうかということなのであるが、占星術にまつわるこの予知と宿命の問題については後述する。

このように人間の生の様々な局面が家のシステムによって決定されるのであるが、寿命の計算についてはこれらとは全く異なる独自の方法が用いられている。寿命、特に権力者のそれを予知することは占星術師にとっても社会にとっても大変に危険なことであり、古代ローマなどでは時の権力者は占星術師が寿命の予知によって社会を混乱させているという理由で何度も彼らを町から追放した。と同時に自身や敵の寿命を知ることは権力者自身にとって

も大きな利益をもたらしたので、優秀な占星術師は特例として彼らのお抱えになることもあった。このような微妙な事情もあり、プトレマイオスが挙げている計算方法は非常に複雑かつ難解で一部は混乱さえしており、古代以来多くの読者を当惑させてきた。テスターはこれについて「当惑させるほど複雑であると同時にほとんどどんな答えでも出せるという点で十分柔軟性のあるもの」<sup>15)</sup>と表現しているが、実際に読者が『テトラビプロス』のこの部分から正確な寿命の予知を行うことはほとんど不可能と思われる。

それでもプトレマイオスの記述からその計算方法を再現すると、おおよそ以下のような形になる。基本的なイメージは東から上り西に沈む太陽などの日周運動で、その人の生命を司る点（「アフエティックな（発出する）場所」「延長するもの」などと呼ばれる）は誕生時から徐々に天球上を東から西へと移動していき、西の地平線に到達すると破壊される。これがその人の死であり、死に至るまでの時間である。多くの占星術師はこの二地点の度数の差をそのまま1度＝1年として寿命の年数に換算しているが、プトレマイオスは球面三角法を用いた特殊な計算法でこの度数の差を寿命へと換算している。

問題は生命を司る点がどこから始まるのかということと、死に至るまでの時間を増減するとされる他の惑星からの影響力がどのように作用するのかということで、プトレマイオスはこれらに対して多様な解釈が可能になるような実に幅広い選択肢を用意している。例えばその始点について見ると、仮にその人が昼に生まれたのであれば、始点の候補となるのは順に太陽の家、月の家、太陽の家に対して支配力を持つ惑星の家、直前の新月の時の月の家に対して支配力を持つ惑星の家、上昇点に対して支配力を持つ惑星の家、そして最後に上昇点それ自体、となる。同じようにその人が夜に生まれたのであれば、優先度順に月の家、太陽の家、月の家に対して支配力を持つ惑星の家、直前の満月の時の月の家に対して支配力を持つ惑星の家、幸運籤<sup>16)</sup>に対して支配力を持つ惑星の家、そして最後に直前が新月であれば上昇点それ自体が、また直前が満月であれば幸運籤それ自体が、始点に定められる。理解させるといよりはむしろ混乱を誘うようなこれらの多様な候補の中から、占星術師はうまく依頼人に合うような始点を選び出し、「解釈」を行うわけである。このような方法において重要になるのは計算の技術や知識よりも、むしろ解釈における個人的技量と説得術であったと思われる。

この寿命の計算法に限らず、占星術の方法論に対してはしばしば非合理的であるとか恣意的であるとかいった批判が古代以来連綿と行われてきたが、そのような批判は一部の合理的精神を持つ知識人層に受け入れられることはあっても、社会全体に行き渡ることにはなかった。占星術がその非科学性を理由に市民権を剥奪されるようになるのはようやく18世紀ごろになってからのことで、しかもその「追放」もそう長くは続かなかった。誰もが知る通り、現代社会においても毎朝のテレビや新聞で占星術的なアドバイスが行われない日はなく、それに一切の関心を持たずにいられる人もほとんどいないのである。

#### 4. 占星術への批判：宿命論と自由

以上見てきたように占星術の方法論の基礎になっているのは天上の世界がこの地上の物事に影響を及ぼすことでその未来までも決定するという考え方で、しかもそこでは超自然的な一回限りの奇跡などが介入することはなく、純粋に自然的な物理作用のみによって説明される（もちろんその説明は「科学的」ではないにしろ）。その意味で占星術の基本的な世界観は唯物論的決定論ということができるが、このような世界観は占星術が生まれ、その基礎理論が整備された紀元前4世紀から紀元後3世紀ごろの間に普及していたストア主義の考えに影響されたものであった<sup>17)</sup>。

アリストテレスの自然学がそうであったように、古代の自然学においては今と異なり遠く離れた物質間に働く遠隔力のようなものは基本的に考えられず、世界に充満した物質の連続的接触のようなものが想定されていたが、ストア派はこのことをよりはっきりと表した。彼らは宇宙の統一性とその内部での物理作用の原因として、ある種の物質的な存在である氣息（宇宙靈魂）の全宇宙への充満とそれによる統一的秩序が存在すると考えたのである。この氣息によって生じる宇宙の諸原因の連続的なつながりと秩序（ロゴス）が宿命（ヘイマルメネー）であり、必然性として宇宙を統御し続ける。地上の我々を支配する宿命とは目に見えない運命のようなあやふやな非存在ではなく、ある種の物質的なものによるある種の物理作用なのである。そして宿命がそのようなものとして存在するなら、それを読み解くための技術である占いも理論的な基盤を得られることになる。

「哲学者たちは、神と知性と宿命は同一であり、他の様々の名前でも呼ばれると主張する。宿命は万物全体のひとつつながりの原因、あるいは宇宙がそれに基づいて秩序付けられているところのロゴスである。あるいは（諸原因の）ある種の系列であり、踏み外されるところのない連鎖であり、原因のゆえに逃れられないものである」（『スーダ』一四二「ヘイマルメネー」の項）。<sup>18)</sup>

「私たちの生誕の時刻が、すでに私たちの死の時刻を決定している。私たちの臨終の時は、生涯の最初の時に左右されるのだ。富も地位も、多くの場合貧しさも、芸術界での成功も、素行も欠点も不幸も、財産の喪失ないし増加も、みな同じ原理から発している。運命が準備したことは必ず起こり、運命が拒むものは絶対に得られない。運命の女神の歓心を買ひ、不幸を避けようと望んでも無駄なこと。人みな己が宿命に従うほかはない」（『占星術または天の聖なる学』）。<sup>19)</sup>

前者はストア派の、後者は最古の占星術文献の言葉であるが、両者はともに宇宙の万物のつながりとそれゆえに逃れられない宿命の存在を認め、それを積極的に受け入れようとしている。そのような仕方でも自身の宿命を受け入れ、何事にも動じない平静な精神の状態を得ることがストア派の理想であったアタラクシアの境地であるが、このような立場と占星術とが強い親和性を持つことは明らかであろう。元老院議員だったフィルミクス・マテルヌスのような人物が『マテーシス』のような占星術書を著しているということなどからも、古代ローマにおいては占星術が知識人層の教養としての地位を得ていたことが見て取れる。

しかし占星術のこのような唯物論的世界観と宿命論は、一神教の世界観を奉ずる人々にとっては簡単に認められるものではなかった。ローマ帝国崩壊後のキリスト教社会とその後に成立したイスラーム社会では、多くの神学者たちが占星術に反対する論陣を張った。議論の基本的な構造はキリスト教でもイスラームでも、またユダヤ教の場合も同じで、そこで問題になったのは占星術の世界観が神の自由と人間の自由を共に侵害するという点であった。

占星術に限らず、一般にアリストテレス主義の自然学と一神教の世界観とは世界の創造や永遠性、死後の靈魂の扱いなど多くの点で衝突していたが、その中でも占星術は究極的に神の介在する余地のない唯物論的な世界観に帰着しかねないという点で重大な異端とみなされる危険があった。トマスが定式化したように一神教における神の本質は「自由」なのであり、世界が神から独立して自律的に全ての運命を定めることなどあってはならないのである。

これと同じことが人間の側の自由と倫理の問題についても言える。これは占星術に対する批判であると同時にストア派の宿命論に対する批判でもあるが、仮に世界が外周部の天体から連続的に発する運動によって完全に決定され、それ以外の可能性がないのであれば、人間の自由意思に基づく倫理的努力も神の恩寵も世界に存在する意味がなくなる。これは一神教の教理から見れば許しがたい異端であり、例えばキリスト教世界ではユスティノスやテルトゥリアヌスらの初期教父、とりわけアウグスティヌスによって占星術は激しく非難された<sup>20)</sup>、またアフロディシアスのアレクサンドロスのような哲学者も同様の論拠からストア派の宿命概念に対する批判を行っている<sup>21)</sup>。アウグスティヌス以後西欧ラテン世界では占星術を含む諸学問が衰退したこともあり、目立った批判は行われてこなかったが、12世紀以降イスラーム経由で諸学問が再度入ってくると、再び占星術を擁護する側と批判する側で議論が戦わされることとなった。ロジャー・ベーコンやアルベルトゥス・マグヌスといった人々が自身の自然哲学の中に占星術を受け入れた一方、ロバート・グロステストやニコル・オレムといった人々は天体の影響力は認めつつもそれを読み取る占星術師たちの能力には疑問を呈している。トマス・アクィナスも天体の影響力が存在すること自体は認めつつもその影響力が及ぶ範囲は人間の身体的部分に限定し、人間の靈魂と意志は天体の影響力から自由であると論じた<sup>22)</sup>。

イスラーム世界でも占星術に対し神学者たちの批判が行われたが、その批判はキリスト教世界以上に一致団結して行われた強力なものであった。中世イスラーム世界でなされた占星術（と天文学）の学問上の進歩は非常に大きいのであるが、そのような動きとは反対に「最初の哲学者」とも言われるアル・キンディーを除き、イスラーム世界の主要な神学者は全員が占星術に対して反対の立場を取っているのである<sup>23)</sup>。これは神学に対する哲学の自立性やある意味ではその優位性すら説いたようなファーラービーやアヴェロエス

のような人においても変わらない。またユダヤ教について見ても事情は同じで、マイモニデスをはじめとした主要な哲学者はやはり占星術に対して反対している。とは言え、これらの批判は完全に知識人レベルのものであり、社会一般においては占星術は広く浸透し、受け入れられていたというのは既に述べた通りである。

以上はキリスト教やイスラームなどの一神教の文脈から出てきた批判であるが、こうした唯物論的決定論に対する倫理的批判は宗教という文脈を切り離れたとしても重要な意味を持つと思われる。「わたし」という人間の身体的、精神的特徴を形作ったのが天であり、その後の「わたし」の活動もすべて生まれた瞬間に決まっているのだとすれば、いったいこの世での「わたし」の活動に意味はあるのか。仮に「わたし」が天の操り人形に過ぎないなら、この世で「わたし」が行う善や悪の責任はいったい誰にあるのか。そこに報奨や刑罰は発生するのか。こうした疑問を考え出すと、決定論は多くの場合ニヒリズムに帰着せざるを得なくなってくる。

21世紀の現代社会においても占星術は以前と変わらず大衆レベルでも専門家レベルでも存在し続けているが、少なくともそれは星の働きによってその後の運命がすべて決まっているというような「ハード」な占星術ではなくなっているし、そのような占星術的決定論を信奉する人はもはやほとんどいないと思われる。代わりに現代社会において提供される可能性があるのは、おそらく遺伝子決定論、ないしは生物学的決定論と呼ばれる科学的決定論であろう。これはその人が生まれてからの環境や学習とは関係なく、遺伝子情報が身体的、行動的形質を形成するという思想ないしは信念であるが、純粋に遺伝学分野における科学理論というよりもマスメディアや一部社会学者によって喧伝された思想という面の方が強い。かつて「惑星」が座っていた地位に今は「遺伝子」が座っているというわけである。

この現代版の決定論に対しても、かつて神学者たちが占星術に対して行った批判と同じように、倫理学者や社会思想家らがその倫理的な危険性について警告を行っている。仮に自分の意志で思考し、行動していると考えている「わたし」がただの遺伝子情報の運び手に過ぎず、その意志や行動が遺伝子によって決定されたものであるなら、人格の尊厳も自由も消滅してしまう。結果として、それは遺伝情報による差別すなわち人種的な差別や「有害な」

遺伝子を持っている人の差別につながりかねず、また犯罪行為の主体をその人ではなくその人の遺伝子に変えてしまうことで司法制度の基礎を崩壊させかねない、と彼らは主張する。

このような現代版の決定論も占星術的な決定論も、共に自然科学的な問題関心から生じてきたものだという共通点があるが、両者には一つ大きな違いがある。それは、自分自身が遺伝子情報の支配下にあるということによって尊厳を得ると感じる人間はおそらく存在しないだろうと思われるのに対し、自身が天の星々の支配下にあるということによって尊厳を得ると感じる人間は相当数いると思われる、ということである。マニリウスをはじめとする占星術師たちがそうであったし、またその多くの信奉者たちもそうであった。

ルターやスピノザの思想において見られるように、宗教思想においては自らの意志の奴隷的状态や絶対的無能力の自覚が、かえって自身とその創造主たる絶対者とのつながりを強固にし、逆説的に人間に尊厳を与えるような場合がある。占星術の場合も事情はこれと同じで、自身が無能力で惑星という上位の存在の支配下にあるという自覚が、かえってその結びつきの意識を強め、自身の尊厳を自覚させるのではないだろうか。

今日でも占星術が多くの人に、しかも神やその他の超越的存在への信仰を持たない日本人にも愛好されていることの理由の一つは、おそらくこの点にあるように思われる。自分の未来や運命を知りたいという欲求ももちろん存在するが、彼らはそれ以上に自身が星の影響のもとにあるという自覚そのものと、それによって得られる尊厳を求めているのではないだろうか。特に20世紀初頭以降に生じた現代占星術では、かつてのものと異なり依頼人の未来の予知などよりも、その心理分析と精神的、靈的向上に関心が集中される傾向があるが、このこともそのような意識と無関係ではないと思われる。

## 注

- 1) なお、メソポタミアと同じく四大文明の一つであるエジプトの天文学が西洋占星術の成立に際して果たした役割は、バビロニアのそれほど大きくはなかった、という点では諸学者の見解は一致している。エジプトからギリシアに伝わったのは主に360日と5日からなる暦と一月を三つに区分するデカン (= 10日) の2つで、後代の占星術的概念のうちエジプトに源を発するものはバビロニアと比べて極めて少ない。今日にまで続く「占星術の源としてのエジプト」というイメージは『ネケブソ=ペトシリス文書』や『ヘルメス文書』といった重要な占星術文献に基づくものと思われるが、そもそもこれらのテキストは太古のファラオや神官によるものとうそぶいているものの、実際にはプトレマイオス朝以降のヘレニズム化したエジプトで作成されたものであり、古代王国時代のエジプトの占星術思想を反映したものではない。
- 2) タムシン・バートン『古代占星術：その歴史と社会的機能』豊田彰訳、2004、23-33頁。
- 3) Ptolemy, *Tetrabiblos*, ed. and trans. by F. E. Robins, 1940.
- 4) 現代ではこれに加えて天王星、海王星、冥王星も加えた10惑星が用いられるのが一般的で、場合によってはより小さな小惑星(カイローンなど)が加えられることもある。なお冥王星は2006年の国際天文学会で惑星の区分から除外されて準惑星とされているが、占星術では引き続き冥王星は惑星として取り扱われている。
- 5) 本論では「宮 signum, sign」と「家 locus, house」という訳語を用いているが、一般的にこれらは科学史などを中心とした学術文献では「宮」「家」と訳される一方、現在でも占星術を実践する人々による一般書などでは「サイン」「ハウス」という英語のカタカナ表記が用いられている。これは現在日本で実践されている占星術が基本的には20世紀に英米圏で生まれたもので、それらが多く参照されているということに由来すると思われる。ただし歴史的に見た場合、重要な占星術文献はギリシア語とラテン語、そして中世イスラームのアラビア語で書かれており、サインやハウスといった言葉が使われることはない。英語で書かれた占星術文献が現れるのはようやく17世紀のウィリアム・リリーになってからである。
- 6) そもそもプトレマイオス自身もいわゆる職業的占星術師ではなく、天文学はもとより地理学、光学、音楽論など多岐にわたる著作を残しており、今日的な意味での占星術師というよりは自然学者と言う方が正しい。
- 7) Ptolemy, *Tetrabiblos*, pp.236-237.
- 8) *Ibid.*, pp.34-39.
- 9) 本論では「支配星 rulership」という用語を用いたが、これは現代占星術の概念で



あって伝統的な占星術では惑星の「宿 domus, house」という。それぞれの惑星が自分自身の本来の持ち場所としているようなものが「宿」であり、その意味でもともと「惑星の宿」なのであって「宮の支配星」なのではない。しかし、「宿」という用語を用いた場合、この惑星の「宿 domus, house」と既に述べた「家 locus, house」はまったく別の概念であるにも関わらず日本語としても似ている上に、英語の訳語がともに house となってしまうと、非常に混乱を招きやすいという欠点がある。それゆえ現代占星術では家を house、宿のほうを rulership と分けて呼び、日本語の一般向けの占星術文献もこれにならって「ハウス」「ルーラーシップ」という言葉を使うのが通例であるが、本論も用語上の混乱を避けるために「支配星」という語を用いることとした。

- 10) これらの宮の諸性質をまとめて示すと以下ようになる。実際は各々の宮の内部にさらに区界、デカン、ドーデカテモリオン、ノーウェナーリィーといった宮それぞれを 1/3 ~ 1/12 ずつに分ける下位区分が設定されることが多いので、これよりもはるかに複雑である。

名称	高揚/失墜	支配星	性別	様態	元素
白羊宮	太陽/土星	火星	男性	始動	火
金牛宮	月/なし	金星	女性	安定	地
双児宮	なし	水星	男性	転換	風
巨蟹宮	木星/火星	月	女性	始動	水
獅子宮	なし	太陽	男性	安定	火
処女宮	水星/金星	水星	女性	転換	地
天秤宮	土星/太陽	金星	男性	始動	風
天蠍宮	なし/月	火星	女性	安定	水
人馬宮	なし	木星	男性	転換	火
磨羯宮	火星/木星	土星	女性	始動	地
宝瓶宮	なし	土星	男性	安定	風
双魚宮	金星/水星	木星	女性	転換	水

- 11) 家は 12 個が全くバラバラの性質を持つわけではなく、1 と 7、2 と 8 など天球上で反対の位置にある家に似たような性質が与えられることがある。
- 12) Ptolemy, *Tetrabiblos*, pp.409-411.
- 13) *Ibid.*, pp.427-437.
- 14) *Ibid.*, pp.271-307.
- 15) S. J. テスター『西洋占星術の歴史』山本啓二訳、1997、114 頁。
- 16) 幸運籤 (ロット・オブ・フォーチュン) とはごく簡単に言えば太陽と月の度数の差の分だけ上昇点から先に進めることで求められる天球上の点であるが、ただの計算上の点であるにも関わらず実際の惑星にも似た影響力を有する特殊な点であると考

えられた。

- 17) 実際の占星術師は決して一枚岩であったわけではなく、人間や神、意志の自由を認める「ソフト」な占星術から上記の唯物論的決定論を信奉する「ハード」な占星術まで幅広く存在していた。「愚人は星に支配され、賢人は星を支配する」というのは有名な諺であるが、これがソフトな側から見た占星術の意義ということになる。
- 18) クリュシッポス『初期ストア派断片集3』山口義久訳、京都大学出版会、2002、234頁。
- 19) マニリウス『占星術または天の聖なる学』有田忠郎訳、1993、168頁。
- 20) アウグスティヌス『告白』上巻、服部英次郎訳、岩波書店、1976、95-97頁ほか。
- 21) 『初期ストア派断片集3』242頁、246-248頁、267-270頁。
- 22) S. J. テスター『西洋占星術の歴史』239-272頁。
- 23) S. J. テスター『西洋占星術の歴史』198-202頁。

## 主要参考文献

- Abu Ma'shar, *The Abbreviation of the Introduction to Astrology*, ed. and trans. by Charles Burnett, Keiji Yamamoto, and Michio Yano, E. J. Brill, 1994.
- Barton, Tamsyn, *Ancient Astrology*, Routledge, 1994. (豊田彰訳『古代占星術：その歴史と社会的機能』法政大学出版局、2004年)
- Campion, Nicholas, *History of Western Astrology*, Continuum, 2009.
- Curry, Patrick, *Astrology, Science and Society*, Boydell Press, 1987.
- Leo, Alan, *The Key to Your Own Nativity*, Cosimo Classics, 2006.
- Leo, Alan, *Astrology for All*, Cosimo Classics, 2006.
- Lilly, William, *Christian Astrology*, Regulus Publishing, 1985.
- Manilius, *Astronomica*, ed. and trans. by G. P. Goold, Harvard University Press, 1977. (有田忠郎訳『占星術または天の聖なる学』白水社、1993年)
- Neugebauer, Otto, *The Exact Sciences in Antiquity*, Dover Publication, 1969. (矢野道雄、斎藤潔訳『古代の精密科学』恒星社厚生閣、1984年)
- Ptolemy, *Tetrabiblos*, ed. and trans. by F. E. Robbins, Harvard University Press, 1940.
- Tester, S. J., *A History of Western Astrology*, Boydell Press, 1987. (山本啓二訳『西洋占星術の歴史』恒星社厚生閣、1987年)

## The Quality of Life and Death in the Tradition of Western Astrology

by Ryohei HIRUMA

Beliefs in the power of celestial bodies and ways of interpreting their meaning are found throughout the world. In this paper, traditional Western astrology is taken as an object of study and its relationship with quality of life, death, and destiny are explored. First, the historical process and environment in which Western astrology was formed are surveyed. Second, the basic theory of Western astrology is viewed through Ptolemy's *Tetrabiblos*, which is regarded as the standard textbook of astrology from ancient times. Finally, the ethical and religious problems that the materialism of Western astrology has caused are discussed, such as the freedom of God and human beings, astrological fatalism, and the meaning of life.

The horoscope of Western astrology, which is the birth chart of each person, has three fundamental components: planet, sign, and house. These three components determine all the dimensions of the life of that person. "Planet" includes the sun and moon, and it is said that these seven planets have productive or destructive power according to the mythological characters they are named after. "Sign" and "house" are particular areas of the zodiac and are derived by dividing the zodiac into twelve parts. Sign is the fixed area that starts from the spring equinoctial point, but house is the fluid area that starts from the ascendant, which is the rising point of the sun and changes everyday. It is believed the power of one's planet adjusted by sign and house flows into each person and forms his or her whole life: parents, siblings, marriage, children, welfare, death, and length of life.